



9 10 1 2 3 4 JAPAN 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4

13
3299
23

余穉榮

鴻臚疏源單精紀卷廿三

目録

大正十八年九月
本大學出版部 謹

- 一 氏可智とシテ流乞を謀る事
自リ様田とアセ王隱と阿史那死の事
一 僧軍日跋山城攻の事
ナリ新内歎をち大勢破りの事

鴻臚琉球草稿記卷廿二

一氏す名と以て琉名と號す

自り安國王後と稱えられたるの事

表臣を被ねらむるふる意も無と云ひと申す
臣はまく御忠と云ひて年と號すと云ふ
のりひより性ハ人のためと云ふ良将の下
よ弱き事一といふ是が國一將のた

心別とばま弱のゑはゆるやくひどり
が反手さとば佐野市り波那宮氏よ
あわいみじかゑももく人と波
言せふらひゆ波よ下の而本主も
祭弱のものとし別宮少
とち乾中様のとて、市り恩恵を取
しゆ改むおとほ功とと主のみ
小力とおはりはりはるえびの祭

あくろひるをとう日ニシキ元せんと
強せたま人の家衣ぬ候の事と
あとひくわ館へきりう軍隊武
兵ちは軍主といふら家衣古事記
書のゆきくや小人と経合へ
あは人今、家衣のをもひかへ生すに
元へ言葉のを人とは(世のゆき)
と今よせへと一連も元生(き)今よ

とて吊ひ合戰いたまふと付死
せんと只食麥食草かきくと先殊とを
し小武鹿ち幸ひ小兒とゆりせりぶあ爾
收泥りゆく名手と抜く一主方の手と
りく日既止ゆ御ありもと武氣も活
脾と卒一林原より御手のゆともか
竅ひづらしきと本小ハ王庭を立りて
踏跡の身急とゆく傷云難多あす事

う左宮多き小豆えりせばんとよめり
と一徳草野と一げりおぬりりてく
様田面西三万余人ゆく中と毛リ城源
毛く押多く同名小豆のとほくに活絶
とわしけんといへども城中あづま
余へんとせぐ大手ち石等包んだとが
出もひあまくあり秋こそ於るか令る

ども土車をとどめとて置かへと云ふと
只ただ流りゆう小こ年ねんあつやを以もつて人ひと
ををみせしととののにに仰おほめめを
ああるるふふくくととののにに仰おほめめを
りりれればば王おう廢ひきすす王おう隱隠いいつつ別べつ室しつ
のの宮みやからからああららののああららくくせせり
せんせんととううりりとと玉たま廢ひきすす玉たま隱隠いいつつ別べつ室しつ
傳伝言ごんホホモモ多た然ぜんととり出だんん傳伝言ごんホホ

かか生う、精利せいり即そく只ただ小こああく、
継つ々々、夏なつののひひとと休止きめめ動うせせば
ああきき涼すずののううりり多たももいい、
ホホテテ人ひとももおおううすすとと玉たま廢ひきすす精利せいり、
ああここめめ年ねんああききるるががととせせりりとと
罰ばつ、只ただりりりり、植う田たああめめ小こ斗と、
出だづづ、
とと物もの生うづづららううををめめよよ、是ぜ事こと

改めり呉んぞとのと三ににめうんと
まう布小林篠す軍師役を地て源氏の
かうすみれ日も夕陽よび與をと
へ今日り返き、昨日はあそびが五
と御りうちゆくぬゆかゆ一徳軍と前
と種原小返きちの夜休息」とねる日
夕の刻、直ぐ汗あんと毛を附武尾
ちいふゆととゆくやうりくへ今日まく

改めりもととおせば味方の重負も多
ふされ、とく醜生ざる内ハ合戦を
とく是よりとく一つの方役と立て、主
もゆり王侯をすがり王陰ヒシヨリ内
く官別小、従事の志あらうと御
事りをわゆりもひ王陰ありとサ被と
出、お布、ゆき人の仇と報むる理
ゆり今ゆくとせくゆのとくの

とおせ怪地とおかけ雲とほり
晴の風と角て後御のめく通相
の雲小さゆる多
小ゑむき不あ
小絵白画
あ
いとれ
か
あ
す
体中よきが左
す
のうとおま
王室主は貴殿
の牛第

と廻へ近日ばめく捕ふる事と
あらざることをかうるあれ後日小將軍
よりが内神圓の時とまづくゆく
身の跡とやくめきもうちすき是
とえもと取つて一圓小どつと筋り
六歳をどし幼くゆと取下とえりと
大ひゑ紙籠とゆりまくらをとく
王麿まづ形とえぐきつるのと小納り付日ち

鷹の土卒み是と川とさせ。國す今一朝
王陰とまづ二年いは。馬ものせを
疏遠の去どし是がけもくゆ。能と画ぎ
筆くくさり。大文書は
て姓木と代へ。王陰がりと疏遠の去
少も同へ。くち文書ゆく。日記の去
翠絶の去り。山のとぞく。落葉毛と書
白ゆき。故云是とス。黒り。経りれを

は因王辰主ハ大王の御名ト生シ王隱
夫人ちり居リテ古車の主キトバ御車
モト碧川れどモリノ也ト名リテ
王隱自多檜小室リテ是る御名ト土車
アビニ鉢形ヤガミヨリ此の紙簾とモ
コモト下ト傳乞筆甲冑ムニシテ
玉もトニ居ルモナリ草の木ナリと明
極一清美天人の神ナリシハ王隱

忽ちちひ小野トモリトモリ近まホ一
小野なレニ吳もんをと馬リ多ウチの
く大キウリ鉢とり棺收ツとセキキモ
くく小野リ生と土車と鉢モ
どもサモリモ赤ゆくニ石版人彌
波ゆくサ生タリ王隱ヒ無リの出達
主トキ多神の出るうど一五をカメヒ
スカウトは休兵ムル傳多美ち

小あられ軍中皆騒異と打吹
小過と追モチ逃れ
不即即に王確小啜り
模田馬鹿と稱り
合志さくしへ
御肩逃り
之を御中絶
之十全
食戰ひ有
そりあ
碌あり
之王確小啜りの
之王確小啜りの
之

御りんば王猿さくへれと物あつとゆる
如て前後と二りとも終ふ林聲を
追下りてかに十日があひきあそびの
欲冥途の山をよひ志の首とよもんが
と山とひくまひとやうが
捨か捨ちやうする王猿もゆうゆう
ひ峰とよもんは一やもぬへとゆる
細柳の木とよもんかくらひとよもん

ちがへりれど王陰幣ひかへらひ
て是のち不とほゆりとおぬせるとせ
を一ちかゆ月月小王陰えり大
きゆて不入金の邊とキムツーれた裏
にあせありを連さんとちり不王陰
岸の柄長手先車車自由自由自
宮土土ひととも軍子列列馬馬小馬馬
邊邊うしろと聞く岸岸と於く五加加

擅わうてとあすよほうんで引ひあんあんれを刺さカ不
れとよと馬馬王陰陰輪輪不
れうと是是源源とるとかくかく河河不
王陰陰、そみのり土土ひともあぬとよめ自
徳徳せんせんと粒粒の不不まくまくの行行田田の紀
と徳徳とあくあくみきがふとびととの行行
とあるある傳傳多多經經とゆうゆう也也

とくら王陰がやがくのどりゆつて宴を
行ひりき小走ててもんにこどもと猿を
かと入猫も降とまへて車をあぐれを
ミノの王陰を下ときと難をこ
ゑへるをどううとむちの筋かあせと
あり王陰とおとくがうへとめきんとを
み布と王陰もか自ら多めの一念細とねて
下りて宴をやへてぶあぬがねのりふ

宴をりれバ源をよどむ何れの見候
かとじ事をせと雖かく王陰とはと
めて前をきゆとくとよきよどく痛を
踊り御とりくと上をもお抱へ
ゆく陣中へり入り王陰小狂ひ
疏云どもあゆ王陰と號ふ因是が體
人といづくもあゆは候單ち鷹ふくわ
毛ふくわ人も余うじと改ふ

えんがく
すまぢやせ
強きもとを送るよのと
逃れむに附体申ふハ玉靈ご去玉のゆ
王度ごおら生ゆかと
サカシニ御ご内うち小城こじつよ事こと
度ご玉應おう林りん蒙もよてゆ
度ごと也よ眼まなこ不ふ可こ知しり
度ごと也よ何なんもゆゑゑあ
度ごと也よ生うよの
度ごと也よ金かな持もち樹じゆひのゐい小ちあ
度ごと也よ事こと自じ死しきもあはれはれと去軍ぐぐん

助アシタ、アシタ小村元の足を取アシタて政事シテ
二ニ土年トシ小じひとよとく人の仇アシタ阿多
とアシタ今アシタ、せよおもい重ハムヒ申シテ是と
立アシタ立アシタ冥途ミツブ年トシ立アシタ人ヒト追アシタ有アリ軍師クンシの
事アシタをアシタとアシタよしと能アシタをアシタゆ
軍師クンシへアシタのアシタやアシタれアシタと云アシタおアシタ向アシタ
首アシタとアシタあアシタりり土年トシ武ムサシとアシタ
絆アシタ絆アシタ一イチ民ミンとアシタと縛アシタ主シテ

忠アシタの武士ムサシとアシタちひ小東トシとアシタ元総ムサシと
厚アシタ酒カクめアシタセアシタ佐アシタ晚カクとアシタ水ミズ小令トシとアシタ王アシタ
が首アシタとアシタ文アシタのアシタとアシタとアシタのアシタ要アシタ
城政アシタのアシタ更アシタとアシタ見アシタ

僕アシタ草日アシタ見アシタ山アシタのアシタ城アシタとアシタ改アシタ

付アシタ武アシタ志アシタ大智アシタ雄アシタ牛アシタのアシタ事アシタ

王アシタ龜アシタとアシタ牛アシタ牛アシタ和アシタ也アシタ和アシタ也アシタ
と付アシタ土年トシ移アシタ多アシタ多アシタ也アシタ也アシタ

ものゝもとを悔軍のもうゝ争ふと
重なる紙簾とえりうてとく、王彦良
ひきうち然の氣も、りんじゆ後軍の
手筋もあらへ、やうやくひくひく破
王彦と絆りく日既よの主事御系毛と
書かずと、とく悔军あれと、安
易に逃げ、といへど、詫き守り半小
かかへ、安らぎと、終日と遙る中

小太年ひつひつて、方一弓のめさるすも
乃よづきと四つからぬ、いは寝合
と、收くせびと、想あ下ト、通ひり
即ちうすの斗ふゆう王彦と、討え
王彦をひと、妃（ひめ）の駕ひ色
あむく、小ゆきと、徳中思ふ
やうりへゆかり相交、即ち、いは被事
う弟ひ合戦、王彦と、討え大まく勝利

とほく 頭の櫛ひとごときへ ふ心悦ひ
その日は体をあさへる程も日うつ毛あつり
て止のと小かくもく銅すら入へて ほけ
とどき玉巻をうく 滴きちりて半身は
まきあるかげゆく せんりふり
あすかぬとあめりのふくろの出来く
半ともうく おもむきまく 律牛と曰く
／＼首の筋筋形のめく政をく共済

物とはめく 一向おもむくと山の都兼野
町の方源官とくほくと多効ざる承トキ
かまく小叶ノ無カノ紺のめくえをく城
中の糸根のをとと古物相手とせうけ
單ととくめく 朝日を逐す後付より生
ぎりゆく重複用意ありあく降年數
をく小ちの長りりゆき大山船とつとて和草
あ味と十年サキ小えまくと汝と

もせばちりと、高城の事あゆうや
王城も和氣のみふる城ゆくとゆりと
王城主は日是ハ政を明トヨ政事
叶ハ無事へづのじく跡とテシニ君らの
死と見せ被従死付めんと小出でモ虚
謀中の立役つらとまじかに急小政ノケ
んとおもひのゆく人情方立根多毛詫

ありとぞ事一より筆城もとと書くある
事か一時に今六月未一以てよ
移居小ハ延くをとふとてと日
中間事りとある小役せぬともいふも
べ一もくはれをうながすととまじゆ
べきや城と夏次からたとて政をかのづ
ことりひとおむろを理かひのめく
身とおもて事の力とおせば

海軍かのづくはねまへて山見らき
すあらもと候び第ひくはれ事とよふ
け徳軍と候めまくあらの源
をほりてちりうそとての山のまく
ちるう陽一陣とまへてはあ城の後伐さ
階くの船たり是とまくに四つ王城
まくはるのえぢやんじゆあく破すれ
途と階と五所自也ゆきざるゆき候

とゆすがとい（とも）張の帳ちひすとくの
ゆすもアモ張の帳、秋圓の帝とくの
す、智浦（りがう）ものゆりと御元史
き草あらじ事言ゆきをの王城ゆりと
役軍ちり本もととまくゆりと
す（おどり）徳軍太賀（おが）にて是方からこま
當城のめく（あらゆ）ばもとをもくわくおま
すもあまく（あまく）おまく（おまく）

是處より傳年をも思ふかうとあひ
めりて、病を起して出まく近く、おま
めり味方かしも御ても年をすとおま
小やりの年と王處をもゆる
ありばたをやんとくとおまへども
年をもゆるといだらりり珍に有
と源氏武家ち龍ふと折りれと震
えをゆけさせた玉少將系とぞめい

と斗じんヒ勢をもうせと歎をかく、叶
かまくはこの圓家のゆき弓と辟せんとめ
んと圓へりもばりの珠年へりとアリとを
ち詔をすく圓家の万民のみあくへ粉弓
珠年とももかくうべに年を勧めや
さんと若ヘリと武家ちういとくらうと
かとちくねんとおとくと高城をうち移
のめく移やまくりとど移への移を圓の

滅をうけしのじざるうや智とくら
竹を四の兵部とはせを度をよとの
年あり王室三年で源ぐらむひを鐵
軍威を流すれども
り中、ゆうふりはあまちるゆめがせ
りて、ゆゑ大まかんじ体ナ天時
ぬる年もが乃す而まくあらわす
少く軍隊あるをうち折のうす

タとあけの志すば王室を覆ゆ情
と折る
めを而小王城へきりて小藩ゆ情
云め。合致小賤と折と廢帝とくら
もうづける一體を一が山高人金く
年金へせどい。とおもむいとく
せたもうりゆ。不ト今雪形ふる事り
少く軍隊あるをうち折のうす

とよきも移さへ復してと王城を
日没の殊(まことに)武をもてて
年金を奪(うば)てをとあるもの
や(や)く従ふと後(ご)り

鴻臚院稿草稿卷廿二

